室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

マルクスと自由―J.グレイの所説を中心として―

メタデータ	言語: jpn
	出版者: 室蘭工業大学
	公開日: 2014-03-04
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 白石, 正夫
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/585

マルクスと自由
—J. グレイの所説を中心として—

白　石　正　夫

Marx and Freedom

Shiraishi,　Masao

Abstract

We have recently experienced the breakdown of 'socialism' in USSR and Eastern Europe. Why did 'socialism' fail? This is an urgent subject today to be made clear. Because socialism was proposed as an idea of a developed democratic society and the very development of democracy is the common aim of our humankind. And because the failure of 'socialism' is quite the one in democracy.

J. Gray attributes the failure of 'socialism' to Marx's theory. He argues that the chief defects of 'socialism' are unavoidable results of the serious attempt to realize Marxian socialism. He asserts that the totalitarianism in 'socialist' states is nothing but a predictable consequence of fundamental flaws in Marx's theory. And he points out that Marx, who was an avowed apostle of human freedom, came ironically to deny human freedom. This paper analyses these arguments of Gray.

目　次

はじめに　現代の思想的課題
一　「社会主義」失敗の原因
二　マルクスと疎外
三　マルクスの自由概念
四　非市場経済の不可能性
五　民主主義と所有形態

六　　マルクスの社会主義像
七　　資本主義と労働者の自由をめぐって

はじめに　現代の思想的課題

ソ連、東欧の「社会主義」諸国が崩壊するという、巨大な歴史的事件を、我々は経験した。我々の多くは、それら「社会主義」諸国は本来の社会主義の道を踏み外し、社会主義としては間違っており失敗だ、という認識をもってはいたが、それらが現実に崩壊するとまでは、率直なところ予測していなかったと云っていいであろう。

さて、このような出来事を体験した我々が、世界史の発展の今日の段階に立って、考えなければならない思想的課題は、何だろうか。「資本主義は勝利した」として、現代資本主義のすべてを肯定し正当化して、これに安住したり、「歴史は終焉した」と悟り澄まし、また絶望したりすることは、求められている課題への解答となり得ないということだけは、明らかであろう。現代世界における貧困・飢え・奴隷状態を常態とする人々の大群、巨万の富と隣り合わせのホームレス・ピープルと過労死の山、これらが、我々が現代資本主義を賛美し、これに身を委ねて安閑としていることを許さないのである。それらが、我々を、次世代のより良き社会像の探求へと駆り立てずにはおかないのである。

ところで、そのような探求に際して、我々を導く指針となり、羅針盤ともすべきものは何だろうか。現代世界では、民主主義の原理がその指針とならなければならない、という点については合意が存在すると云っていいだろう。その点、我々は、「社会主義」は失敗した、資本主義も問題が多すぎる、ではどうすべきかと考えるに当り、行く先も分からず、羅針盤もなく途方にくれた状態でいるわけではないのである。近代以来、人類は、民主主義の発展という方向に、自分たちの社会の進むべき道を明確に設定し、遅々とではあるが着実に前進してきたといっていいであろう。この発展方向についての合意は、第２次大戦後、ファシズムの原理や植民地主義の崩壊とともに、一層広がり、普遍的確

認事項となったと云って差し支えないのである。

それゆえ、「ポスト冷戦時代」は、普遍的なものは何もありえず、暗中模索の中では、ナチズムも「民族の浄化」も王政の復活も、それなりの根拠を持ち相当の真理を体現しているのだ、などという議論には到底与することはできないのである。従って、今我々に課せられている思想的課題は、民主主義の方向に社会を発展させるに当り、如何なる問題や障害があるのかを明らかにすること、それらをいかに解決すべきかの方法を提示すること、これである。

さて、既存の「社会主義」の失敗の原因を解明することは、この課題の重要な一部分をなすと言えるであろう。なぜならば、社会主義は、民主主義の発展または徹底化、あるいは民主主義の実現として、資本主義の次世代の社会像として提起されたものであるからである。そして、民主主義の発展であるはずの「社会主義」の間違いや失敗とは、まさにその民主主義という点で決定的な欠陥を「社会主義」が持っていたということなのである。従って、民主主義という点でより良き社会を次代に展望するに当って、どのような問題があるのかを明らかにするためには、「社会主義」の失敗の原因を解明することは避けて通れない課題なのである。

筆者は、これまでもこの課題に答えようと試みてきたのであるが、小論もまた、このような試みの一部をなすものである。ここでは、「社会主義」の失敗の原因をマルクスの理論に求めている J. グレイの所説[1)]を批判的に取り扱うことを中心に据え、それとの関連で G.A. コーエンの議論[2)]にも触れつつ、筆者なりのマルクス解釈も試みようとするものである。

一　「社会主義」失敗の原因

J. グレイは、既存の「社会主義」の失敗の内容を、次のように列挙している。即ち、エリート官僚による支配、経済的危機、人民の運動と精神的自由への抑圧、そして西側の技術と資本の輸入への依存、これらである。そして、彼は、その失敗の原因を次のように説明する見解を、アカデミズムにおける陳腐な決

まり文句だと批判する。その見解とはこうである。即ち、逆境の中で誕生し、敵対勢力に包囲され、外敵からの防衛の必要に苦しみ、遅れた反動的な住民を教化するという大仕事に悩まされ、今世紀の社会主義革命政府はどれも、マルクスの社会主義をその真の姿で実行するチャンスがなかったのであって、このような歴史的偶然事によって、マルクスの理論を判定し、これを関違いと評価することはできない、というものである。[3)]

さて、グレイは、これに対して待ったをかける。そもそもそのような見解の代表者たちにとっては、マルクス主義は、理論と実践の統一の模範例ではなかったのか。つまり、マルクス主義にとっては、実践は理論の試金石だったはずである。従って、実践が間違いなら、理論が間違っていたことになるはずだ。何故なら、理論は歴史とその教訓からの総括である、というのがマルクス自身の思想だからである。理論の唯一の源泉たる実践つまり歴史的経験、これから抽出されたものとしての理論、この理論を実践した結果が間違いなら、理論にその原因があるとするのが、理の当然というものである。[4)]

かくて、グレイは、次のように断ずる。既存の「社会主義」の主要な欠陥は、マルクスの社会主義を歴史の現実において具体化しようとする真剣な試みの不可避的帰結であり、構造的必然性をもったものである。そしてまた、マルクスの社会主義を実践した結果として生じた全体主義は、マルクス社会主義の理論的基礎にある根本的欠陥の明白な予期しうる結果である。このようにして、グレイは、自由の使徒を自認するマルクスの理論が、皮肉にも人間の自由を否定する結果を生み出す必然性を内包していたのだ、と結論づけるのである。[5)]

以上が、グレイの主張のアウトラインである。次節から、この主張を詳細に検討することとしよう。

二　マルクスと疎外

グレイによれば、疎外論はマルクスの全体系を貫いているものであり、そこでは、疎外とは、人間が自分の作り出したものに支配されることを意味してい

る。[6]さらにグレイは考える。人間の不自由についてのマルクスの思想は、この疎外論に示されている。その思想の核心は、資本主義においては人間は市場の力によって支配され奴隷化されている、というものであり、これが、マルクスの資本主義否定の動機となっている、とグレイは主張する。従って、マルクスにとって資本主義の問題点は、資本主義における所得の分配の問題にあるのではなく、資本主義的私的所有にあるのでもなく、商品生産にこそある。何故なら、資本主義社会における人間の自由の喪失は、商品と商品交換法則とによって人間活動が支配されていることにあるからである。[7]このようにグレイは理解し、その論拠として、マルクスの『経済学批判要綱』を引用している。この個所は、疎外論が展開されているわけではなく、交換価値の実現としての流通について述べられている所なのであるが、ただその引用個所の最後の部分をグレイは、疎外現象を叙述したものと理解しているのである。その最後の部分は次のように書かれている。「個人を越えた自立した力としての個人相互の社会的関係は、今やそれが自然力、偶然またはその他任意の形態で表象されようと、出発点が自由な社会的個人でない、ということの必然的帰結である。」[8]ここの部分で、マルクスは、社会的な諸力の自立した存在が破壊されれば、疎外は克服され、人間の自由が達成できると考えた、とグレイは把握しているのである。従って、グレイにとって、マルクスの社会主義とは、商品生産の廃止を中心的内容とするものであり、生産者による生産の意識的・目的的統御を意味している。[9]

ここで一言だけ口を挟んでおこう（グレイに対する批判は、後ほど全面的に行う）。上述のとおり、グレイにとって、マルクスの社会主義は、資本主義的私的所有の廃止を中心的内容とするものではない。何故なら、マルクスにとっては、資本主義の問題点は、資本主義的私的所有にあるのではないから。問題は商品生産と交換にあるのだから、社会主義の中心的内容は、商品生産の廃止であり、生産者による生産の意識的・目的的統御である。ならば、私的所有に基づく統制経済も社会主義だ、ということにならないか。ともあれ、マルクスと自由の問題に対するグレイの理解は、混乱ないし混同と誤解に基づいている。

この点の論証は後で行うとして、今少しグレイの説明に耳を傾けておこう。

次に、グレイは、上述の主張を補強するために、『資本論』から次の個所を引用している。「社会的生活過程の、すなわち物質的生産過程の姿は、それが自由に社会化された人間の所産として人間の意識的計画的な制御のもとにおかれたとき、はじめてその神秘のヴェールを脱ぎ捨てる。」[10]もちろん、グレイは、この個所を、マルクスが疎外とその克服としての自由について語っているものとして引用しているのである。そこで、グレイは続ける、「社会主義では、生産様式は、交換のための商品生産から、使用のための財の生産へと転換される。資本主義の弁証法的否定として、社会主義は、資本主義的商品生産の組織原理の廃止、または超克として理解されるしかない。疎外の克服とは、マルクスの著作の中で他にどんな意味をもっているにしても、少なくとも、中心的には、このことを意味している。即ち、人間の生産活動が直接的であって、もはや商品生産制度によって媒介されていないこと、これである。」[11]従って、人間が社会主義で獲得する自由とは、不干渉としての自由や実行・享受といった個人の積極的自由ではなく、自立した社会的力や法則からの自由、資本主義的商品生産の廃棄によって得られ、生産の意識的計画化の中で行使される自由である。このようにマルクスを解釈するグレイにとっては、「社会主義と計画的生産とは、一つの、同じ生産様式の二つの相であり、中央計画は、現存社会主義経済の偶然的制度ではなく、社会主義のまさに本質なのである。」[12]

以上のグレイのマルクス解釈を、グレイ自身の言葉でまとめると、次のようになる。「資本主義の不自由は、市場プロセス自体による労働の疎外にある。これを超克するには、商品生産の廃止と直接的使用のための生産への転換によるほかない。この後者の要件こそ、マルクスの社会主義構想の中心的要素である。」[13]

さて、周知のとおりマルクスは、労働の疎外については、『一八四四年の経済学・哲学手稿』で述べている。筆者は、別稿でこれを分析し、結論として次のように指摘しておいた。「マルクスは、疎外された労働を、生産手段の資本主義的所有に基づく、資本と労働者の支配・従属関係から生ずるものと見てい

るのである。市場・流通過程から生ずる疎外ではなく、生産過程から生ずる疎外について語っているのである。」[14)]つまり、マルクスは、疎外を市場の力に人間が支配されていることなどと捉えていたわけではなく、資本と賃労働との生産関係とその下での生産過程から生ずるものと見ているのである。本来人間の自己実現活動であり、本質的に人間的活動である労働が、資本主義社会では、自己喪失活動となり、非人間的活動となってしまうこと、マルクスは疎外をこのように理解しているのである。それゆえ、マルクスにとっては、疎外の克服、即ち人間の自由な自己実現は、「商品生産の廃止と直接的使用のための生産」つまりは市場の廃止によって達成されるのではなく、資本主義的私的所有の廃止によってこそ獲得できるのである。この点で、グレイは決定的に誤解しているのである。グレイはまた、既述の通り、マルクスにあっては「人間が社会主義で獲得する自由は、不干渉としての自由や実行・享受といった個人の積極的自由ではない」と理解しているが、疎外の克服としての自由とは、人間の自己実現の自由を意味している事は明らかであって、まさにグレイがいうところの「実行・享受と云った個人の積極的自由」そのものである。(マルクスの自由概念が、「不干渉としての自由」を含んでいるかどうかは、ここで詳論しない。ただ、マルクスは、自己の社会的活動の当初から、思想の自由、言論の自由、出版の自由等「不干渉としての自由」のために闘い続けた、この点を想起しておきたい。そして、人に自己実現ないし幸福を強制することはできない、という一般論を付け加えるにとどめたい。) グレイはまた、マルクスの疎外論、即ち資本主義社会における人間の不自由に関する思想こそ、マルクスの資本主義否定の動機となっており、根底的論点をなしていると把握しているのであるが、市場から疎外が生ずると捉えてしまったために、疎外にかかわっての資本主義の問題点は資本主義的私的所有にある、とするマルクスの肝心の論点が分からなくなってしまったのである。従って、資本主義の否定としての社会主義の本質的特徴が、商品生産の廃止と直接的使用のための生産、即ち市場の廃止にあるとしか認識できず、疎外の克服としての「マルクスの社会主義構想の中心的要素」が生産手段の社会的所有であるという、この点に思いが及ばなくなって

しまったのである。大きな誤解である。

三　マルクスの自由概念

さて、これまでの議論を注意深く見れば、既に明らかなように、マルクスの自由概念には、二つのものが含まれている。一つは、疎外とのかかわりで捉えられている自由であり、もう一つは、自立した社会的力や法則とのかかわりで論じられている自由である。一方の不自由は、人間の自己喪失、人間性の否定としての不自由、他方の不自由は、個人を越えた社会的力や盲目的法則に支配され、個人の思い通りにならないこととしての不自由である。前者の不自由は、資本主義的私的所有の下における生産過程から生ずる。後者の不自由は、流通過程即ち市場関係から生ずる。(但し、後者の不自由の原因は、ただの市場関係ではなく、資本主義的私的所有を前提とした市場関係にあるという側面を見落としてはならない。資本主義的私的所有という前提がなければ、市場関係だけを原因とする不自由は、前提つきの不自由より軽減すると考えられるからである。)前者の不自由の克服、即ち自由の実現は、資本主義的私的所有の廃止と、生産手段の社会的所有によってもたらされ、後者の不自由の克服としての自由は、生産の組織化・計画化・即ち意識的統御によって実現される。

ところで、マルクス主義は、資本主義の基本的矛盾を、生産の社会的性格と取得の私的資本主義的形態との矛盾として理解する。つまり資本主義の本質的特徴をその生産手段の所有関係にあると見るのである。そして、分配・交換・消費の形態は、この本質的所有関係に規定されて、それにふさわしい形態を受け取るのである。即ち、資本主義的市場関係・流通過程がそれである。個々の工場における生産の組織的性格と社会全体での生産の無政府性という矛盾は、先の基本矛盾の、流通過程における発現形態である。即ち、資本主義的取得形態であるがゆえに、市場は無政府的性格をもち、個人は、自分の意思から独立した盲目的法則に支配され、不自由となる。つまり、資本主義的所有関係から生ずる疎外としての不自由が、基本的なものであり、市場関係における不自由

は、疎外としての不自由の現象形態として、所有関係を前提としたものなのである。従って、先にも少し触れたが、論理的には、資本主義的所有関係がなくなり、市場関係だけが残った場合には、市場関係における不自由は、なくなりはしないとしても、軽減されるか形が変わるであろうが、市場関係がなくなっても、所有関係が変わらなければ、疎外としての不自由はなくならず、軽減されもしないと考えられる。

さて、この辺りで、グレイの議論に戻ることとしよう。グレイは、マルクスの自由概念を、どのように捉えていたか。既述のように、マルクスの云う資本主義における不自由とは、疎外としての不自由である、とグレイは考えた。ところが、グレイにあっては、その疎外としての不自由は、資本主義的所有関係のもとでの生産過程から生ずる人間の自己喪失というマルクス自身の意味ではなく、市場の力によって支配されて人間が自由を失っていることを意味していた。マルクスが疎外を市場から生じるものと看做している、とグレイは誤解したのである。つまり、マルクスの二つの自由概念、即ち「疎外と自由」と「市場と自由」とを、グレイは混同してしまっているのである。疎外が市場によって生じると理解したために、「疎外と自由」にかかわってのマルクスの思想が、「市場と自由」にかかわっての意味を持つものとされてしまい、マルクスの二つの自由概念が一つの意味しか持たないものとされているのである。即ち、マルクスの自由概念は、「疎外と自由」一本だけであり、しかも「疎外と自由」は「市場と自由」を意味するのだ、というように矮小化されているのである。それゆえに、グレイは、マルクスの疎外論こそ彼の資本主義拒否の動機づけとなっている、と捉えながら、マルクスにとっての資本主義の問題点は、資本主義的私的所有の問題なんかではなく、商品交換を支配する盲目的社会的力の方である、としてしまう。そこで、疎外の克服としての社会主義の中心的内容は、資本主義的私的所有の廃止ではなく、商品生産の廃止と直接的使用のための生産だとされる。肝心要のより本質的内容が無視され、その現象形態の方だけが重視される。そしてさらに、社会主義における生産の意識的・目的的統御とは、この「直接的使用のための生産」を意味すると看做され、この点でマルクスが

市場の廃止を主張したと断定される。「この点で」といったのは、他に、このことを根拠づけるマルクスからの直接の引用を、一切していないからである(このことは、また後に触れよう)。

ところで、グレイは、マルクスの疎外論について述べながら、マルクス自身の疎外に関しての叙述を全く引用していない。そのかわりに、先に紹介したように、マルクスの流通過程・市場に関する記述だけが引用されていた。それは、グレイが、疎外を市場を原因とするものと誤解し、「疎外と自由」を「市場と自由」と混同していた結果であり、また原因でもあったのである。それと同時に、グレイは、マルクスの自由概念を論じながら、マルクスが自由について豊かに語っている個所を全く引用していない。そこで、マルクスの自由観を確かめるために、ここでマルクス自身を引用しておこう。「じっさい、自由の国は、窮乏や外的な合目的性に迫られて労働するということがなくなったときに、はじめて始まるのである。つまり、それは、当然のこととして、本来の物質的生産の領域のかなたにあるのである。未開人は、自分の欲望を充たすために、自分の生活を維持し再生産するために、自然と格闘しなければならないが、同じように文明人もそうしなければならないのであり、しかもどんな社会形態のなかでも、考えられるかぎりのどんな生産様式のもとでも、そうしなければならないのである。彼の発展につれて、この自然必然性の国は拡大される。というのは、欲望が拡大されるからである。しかしまた同時に、この欲望を充たす生産力も拡大される。自由はこの領域の中ではただ次のことにありうるだけである。すなわち、社会化された人間、結合された生産者たちが、盲目的な力によって支配されるように自分たちと自然との物質代謝によって支配されることをやめて、この物質代謝を合理的に規制し自分たちの共同的統制のもとに置くということ、つまり、力の最小の消費によって、自分たちの人間性に最もふさわしく最も適合した条件のもとでこの物質代謝を行なうということである。しかし、これはやはりまだ必然性の国である。この国のかなたで、自己目的として認められる人間の力の発展が、真の自由の国が始まるのであるが、しかし、それはただかの必然性の国をその基礎としてその上にのみ花を開くことができるので

ある。労働日の短縮こそは根本条件である。」[15] ここで、マルクスは、自分の二つの自由概念を明確に区別して述べている。ところが、グレイは、自己の主張のまとめとして、次のように結論づけている。「マルクスの自由観は……不干渉とか自己実現と云った自由主義的概念のなんらかの変形物ではない。むしろ、マルクスの自由観は、経済的、社会的生活の合理的計画化による、集団的自己統治を意味している。マルクスの自由は、非人格的な社会法則や力の支配下での自己喪失としての疎外、これの反対物である。」[16] このように、先にも指摘したが、グレイは、マルクスの二つの自由概念の内のより本質的な方を無視し、または理解できず、もう一方の概念だけを取り上げて、これをただ一つのマルクスの自由概念だとし、歪めてしまっているのである。そしてさらに、マルクスが個人の自由に法的保護を与えようとしないのは、「そのような保護は、彼が考える自由、即ち社会生活の意識的、協同的計画化の実行を危険にさらし、また制限するからである」と断じているのである。[17]

四　非市場経済の不可能性

既述のとおり、社会主義では、交換のための商品生産から直接的使用のための財の生産へと転換されることによって、疎外は克服され、生産の意識的・計画的統制としての自由が獲得される。このようにマルクスを理解したグレイにとって、マルクスの構想する社会主義では、市場の廃止と中央計画指令型経済の採用は当然のことと思われた。そして、このマルクスの社会主義は、マルクスの予測できなかった不可能性を孕んでいる、と以下のように論証する。

先ず、グレイは、人間の知的不完全性ないし限界を指摘する。何百何千万の人々や多数の経済体の間に分散している需要や供給その他に関する情報、これらに関する詳細な情報が、合理的資源配分のためには必要とされる。社会主義の経済計画を成功させるためには、これらの情報を、単一の中央計画機構に集中しなければならない。ところがこれらの情報は、口に出して云われないもの、身体で覚えたもの、一時的ですぐ古くなってしまうもの等々であって、これら

を利用可能な合理的な形で単一体に集中することは到底不可能である。即ち、中央計画者は、計画を成功させるために必要とする情報を認識することができない。市場は、市場価格を通じて、これらの無数の複雑に入り組んだ情報を伝える。市場を廃止すれば、この情報を有効に伝えるものがなくなり、これらが認識不可能となり、合理的・成功的中央計画は、そもそもの初めから不可能である。このようにグレイは主張している。[18] この辺りは、なかなか説得力がある、と筆者は考える。

次に、グレイは、社会主義計画と個人の自由との両立不可能性に議論を進める。「市場競争のかわりに中央計画を、というマルクスの企図が不可能性を内包しているとすれば、マルクスの社会主義秩序には、少なくとも一種類の自由が最初から危険にさらされていると思われる。即ち、社会主義経済システムの失敗の原因に対する知的探究の自由がそれである。」[19] そして、マルクス主義の教義はこれらの失敗とは無関係だ、と説明するためのイデオロギー的コントロールの機関がすぐに必要となる、とグレイは語る。[20] グレイは、この自由の欠如は、社会主義に不可避のより広範な不自由の一例に過ぎないとして、さらに議論を展開する。即ち、社会主義経済計画は、マクロ・コントロールとは異なり構造的計画であって、経済活動の詳細なパターンについての決定と実行を含んでいる。このような中央計画は、民主的プロセスで処理できない。また、この中央計画が強制的なものではないとするためには、ある程度の道徳的コンセンサス、人生観や価値観の一致を前提とする。その道徳的一致がないとすれば、中央計画者は、諸々の必要や価値について、それらの優先順位について、自分の判断を強制する以外にない。[21] いずれにしろ、マルクスの矛盾のない計画化社会という理想は、人間と人生の多様性を否定し、特色ある文化的伝統や特殊な文化的価値を消し去ってしまう企てであって、恐るべき画一主義というほかない。グレイはこのように指摘する。[22] ともあれ、一旦計画が立てられれば実行されねばならず、それは多方面に経済変動の負担を負わせる。この結果生ずる紛争は、強制的手段で解決されるほかなく、その結果として労働者の自由が真っ先に失われる。[23] 以上のように、グレイは、社会主義における

不自由を摘発する。中央計画経済という、もともと不可能なことを実現しようとする真剣な試みが、全体主義体制と自由の抑圧という結果を生み出したというのである。[24)]

さらに、グレイは、市場社会主義の問題点にも触れている。即ち、市場社会主義は「社会主義命令経済に付き物の不可能事を免れるが、マルクス主義の観点からは深刻な不利益を被る。つまり、それは、商品生産を廃止せず、従って、経済活動のパターンの決定を、生産者の集団的意志にではなく、人間の行為の予期せざる結果に委ねている。それゆえ、それは、マルクスの企図した疎外の克服を実現できない。」[25)]そして、市場社会主義は、社会主義的公正や平等という価値を保持するために、また、自主管理企業相互間の関係を調整するために、継続的で永久的な中央政府の干渉を必要とする。これは、市場社会主義が擁護する自治・自主管理を、ひどく傷つける。従って、自由への危険は、命令経済的社会主義よりは少ないとはいえ、やはりその危険は依然として深刻である。このようにグレイは述べている。[26)]

さて、中央計画指令型経済は、計画に合理性を与え、指令に成功の保証を与えるために不可欠の情報を認識できず、非効率で莫大なコストの負担を、その社会に強いる。また、このタイプの「社会主義」は、個人の自由に対する危険を内包している。このようなグレイの指摘は、正しいと言っていいだろう。既存の「社会主義」諸国も、事あるごとに市場経済を導入しようとしてきたし、今日もその方向が目指されている、というのは周知の事実である。また、知的探究の自由をはじめとする個人の自由を保障しない「社会主義」とは、自己の失敗を正し、自己を維持し発展させるために不可欠の手段を、自ら投げ捨てていることを意味している。つまり、それは、自損的・自殺的「社会主義」であって、当然崩壊する以外に進む道はなく、まさに、その通りになっている。従って、それがマルクス理論に内在するものという批判は、当らないであろう。さらに、グレイの、マルクスに対する文化的価値の画一主義という批判は、相手を間違っており、資本主義にこそ向けられるべきであろう。何故なら、資本最大化を唯一の目的とし論理とする資本主義は、資本のブルドーザーで世界中を

均し、世界を資本色一色に染めずにはおかないものだからである。

ところで、中央計画指令経済を批判し、市場の有効性を評価するからといって、一切を市場経済に委ねる市場経済万能主義が正しいと言うことにはならないであろう。人類の生存という視点から見て、環境・エネルギー・資源問題の解決を市場経済に任せてしまうことはできなかろう。民主主義社会の実現という視点から見て、土地・教育・医療・老人・障害者等々の問題も、市場経済によっては解決できない。従って、体制の如何を問わず、現代社会は、全社会的規模で、また地球的規模でも、経済活動の計画化、組織化を迫られているのである。それゆえに、そのような組織化・計画化が、個人の自由を圧殺し、その社会を自損や自殺へと追い込むことのないように、政治・社会体制の民主主義が不可欠なのである。この点、中央計画指令型経済だけでなく、現代資本主義経済も、政治権力と一体化して、ファシズムへ向かおうとする不断の傾向性をもっている、この点の指摘が、是非とも必要である。従って、中央計画経済を批判した結果が、資本主義市場経済こそ自由で効率的で万々歳ということになってしまうのではお話にならない。もちろん、お話にならないというのは、民主主義的な意味で、人間にとってということであって、資本にとってというのなら、話は別である。

五　民主主義と所有形態

さて、グレイは、既に見たとおり、マルクスの社会主義は中央計画経済だ、と考えた。なぜなら、マルクスを社会主義へと動機づけたものは、疎外の克服という課題であり、資本主義社会における疎外は、市場を原因としているからであった。従って、疎外の克服としての社会主義は、市場の廃止を中心的内容としており、市場の廃止によってこそ自由が実現できる。これがマルクスの理論的核心だ、とグレイは確信した。そして、この市場の廃止としての社会主義は、不可能事の実行を意味しており、結果として巨大な無駄と自由の圧殺を生み出しただけである。従って、社会主義は駄目で、資本主義こそ正しいのだ、

というわけである。しかし、このような議論にとどまっていたのでは、民主主義的社会像の探究という我々の課題にとっては、お話にならない。マルクスは、自己の社会主義構想に、人間の自由と民主主義の実現の夢を託した。この点は、グレイも否定してはいない。つまり、マルクスは、民主主義を実現するものとして、社会主義を構想したのである。そして、マルクスにとっては、疎外の克服としての社会主義は、グレイが誤解したように、市場の廃止ではなく、生産手段の社会的所有を中心的内容としていたのである。何故なら、疎外という人間の不自由は、生産手段の資本主義的所有を原因としているからである。それゆえ、自由と民主主義にとっての社会的所有という中心的内容の持つ意義を見ないで、市場廃止だから駄目と切り捨ててしまうのは、余りにも単純な暴論であろう。汚れた行水の湯を流すのに、赤ちゃんまで一緒に捨ててしまうようなものである。それゆえ、我々は、ここで民主主義と生産手段の所有との関係に触れておく必要があろう。我々は、政治の分野において民主主義を論ずる際には、人民が政治活動の主体であることが大切だと考える。人民が政治活動の主体であるとは、人民が主権者であるということである。人民が主権者であるとは、人民が、主権の所有主体であり、主権の行使主体でもあり、さらに人民が主権行使の目的でもある、このことを意味している。これが、リンカーンのゲティスバーグ演説の内容である。即ち、'government of the people, by the people, and for the people' である。ところで、我々は、この民主主義を、政治の分野だけにとどめておく必要はないし、むしろ積極的に経済の分野にも導入する必要があると考える。何故なら、経済の分野における民主主義がなければ、政治分野の民主主義は、裏書きを欠き、形式的なものにとどまり、形骸化する危険があるからである。マルクスも、人間の解放について、歴史的にまずは政治的解放を、次いで経済的解放を考えた。[27] 経済の分野に民主主義を導入するには、我々は、政治分野における民主主義とパラレルに考えることができるし、また考えなければならない。即ち、人民が経済活動の主体となることである。人民が経済活動の主体になるとは、経済活動の手段たる生産手段の所有権を持つことである。これが、経済分野において、政治において人民が主権者で

あることに対応するものである。経済において人民が主権者であることと言ってもよい。それは、つまり、人民が、生産手段の所有主体であり、行使主体であり、行使の目的でもある、ということである。我々は、次代により民主主義的な社会を展望しようとするならば、経済においても人民が主権者であるという、この点を考慮に入れないわけにはいかないと考える。生産手段の所有の問題を全く取り上げず、ただ市場経済であるかどうかだけを問題として、資本主義を称賛する者は、人類にはより良き明日はないとする「歴史の終焉」の立場に立つものである。マルクスも、人民が生産手段の所有主体となるという点を、次のように指摘していた。「(コミューンは) 現在おもに労働を奴隷化し搾取する手段となっている生産手段、すなわち土地と資本を、自由な協同労働の純然たる道具に変えることによって、個人的所有を真実にしようと望んだ」[28]「労働者は、その労働手段の所有者となるときにのみ、自由となる——これは、個人的形態あるいは集団的形態をとることができる——個人的所有形態は経済的発展によって排除され、日ごとにますますそうなる——従って共同所有の形態だけが残る。」[29]経済的発展の結果、生産手段の可能な所有形態は、共同的形態だけになってきている。この共同的所有の中で、個人が生産手段の真実の所有者となるときに、個人は自由となる。このようにマルクスは語っているのである。

六　マルクスの社会主義像

既述のとおり、グレイは、マルクスを市場廃止論者と極め付けている。ところが、そのように極め付けることができる証拠を示していない。つまり、マルクスが、端的に社会主義では市場は廃止されると述べている個所を、グレイは引用していないのである。先に示したように、グレイが直接マルクスを引用している二つの個所は、いずれも、市場とのかかわりでの人間の不自由と、生産の意識的統制としての自由の獲得とについて語っているところである。しかも、グレイは、これら部分を、マルクスが疎外とその克服としての自由について語っ

ているもの、として引用していたのである。そして、マルクスは、疎外の克服として社会主義を構想したのであり、疎外の原因が市場にあると考えたのであるから、社会主義での市場の廃止を主張したのは当然だ、とグレイは断定したのである。しかし、生産の意識的統制ということが、直ちに市場の廃止を意味するのだとは言えない。市場経済のマクロ・コントロールということがありうるからである。グレイも、これがマクロ・コントロールを意味するなら、マルクスを市場廃止論者と断じられないと分かっていたようである。それゆえ、先に見たとおり、マルクスの社会主義経済計画は、マクロ・コントロールではなく構造的計画であり、経済活動の細部にわたっての決定と実行を含んでいる、と述べているのである。しかし、これを論証するための引用は、全くしておらず、独断というほかない。

では、マルクス自身は、自らの社会主義経済をどのようにイメージし、なんと語っているのか。マルクスは、社会主義社会について、青写真のようなものはほとんど描いていない。彼は、資本主義分析の叙述の折々に、断片的に、しかも、当の資本主義批判から語りうる範囲内の大まかなアイディアや基本的な理念・原理を語っているだけで、将来の社会主義社会像を細部にわたって描いてはいない。二三引用しておくと、それらは次のとおりである。「共同の生産手段で労働し自分たちのたくさんの個人的労働力を自分で意識して一つの社会的労働力として支出する自由な人々の結合体」[30]「社会化された人間、結合された生産者たちが、盲目的な力によって支配されるように自分たちと自然との物質代謝によって支配されることをやめて、この物質代謝を合理的に規制し自分たちの共同的統制のもとに置くということ、つまり、力の最小の消費によって、自分たちの人間性に最もふさわしく最も適合した条件のもとでこの物質代謝を行うということ」[31]「協同組合的生産が、……資本主義制度にとってかわるべきものとすれば、もし連合した協同組合諸団体が共通の計画にもとづいて全国の生産を調整し、こうしてそれを自分たちの統制のもとにおき、資本主義的生産の宿命である不断の無政府状態と周期的痙攣とを終わらせるべきものとすれば——諸君、それこそはコミュニズム、“可能な”コミュニズムでなく

て何であろうか？」[32]ここで述べられている原理は、グレイ自身が先にマルクスから引用した個所で、物質的生産過程を「自由に社会化された人間の所産として人間の意識的計画的な制御のもとにおく」と表現されているものと全く同じである。即ち、ここでは、具体的に市場の廃止とそれにかわる経済組織を提案しているわけではなく、経済過程を「意識的計画的制御のもとにおく」という大まかな原理が語られているだけなのである。つまり、「細部にわたる決定と実行を含んだ構造的計画」が述べられていたのではないということである。

ところが、マルクスの著作の中に、社会主義経済の姿を少し具体的に述べていると思われるところがある。そこには、市場の廃止を示唆していると取られかねないような叙述がみられるのである。その部分をここで検討しておこう。まず『資本論』の商品の物神的性格についての節では、次のように述べられている。「共同の生産手段で労働し自分たちのたくさんの個人的労働を自分で意識して一つの社会的労働力として支出する自由な人々の結合体を考えてみよう。ここでは、ロビンソンの労働のすべての規定が再現するのであるが、ただし、個人的にではなく社会的に、である。ロビンソンのすべての生産物は、ただ彼ひとりの個人的生産物だったし、したがって直接に彼のための使用対象だった。この結合体の生産物は、一つの社会的生産物である。この生産物の一部分は再び生産手段として役立つ。それは相変わらず社会的である。しかし、もう一つの部分は結合体成員によって生活手段として消費される。したがって、それは彼等のあいだに分配されなければならない。この分配の仕方は、社会的生産有機体そのものの特殊な種類と、これに対応する生産者たちの歴史的発展度とにつれて、変化するであろう。」[33]ここで、まず明らかなことは、ロビンソンの生産物は、直接的・個人的使用のための生産物であること。それに対して、社会主義社会では、生産物は社会的生産物であり、個人的使用のためには分配されなければならない。また、社会的分業を前提としているから、生産は直接的使用のための生産ではありえず、他の社会成員のための生産であり、従ってまた、生産物は分配されねばならないこと。これらが明らかと言えるだろう。既述のように、グレイは、「直接的使用のための生産」をマルクスの社会主義

の中心的アイディアだと主張していた。だが、ロビンソンの島とは異なり、社会主義社会での生産が直接的使用のための生産でないことは明らかである。なるほど、それは、資本主義社会とは異なり、資本最大化のための商品生産ではなく、社会全体にとっては、直接的使用のための生産と言えるかもしれない。しかし、社会主義社会でも、生産は、個々の企業体間で分業して行われるのは当然で、生産物は、分配されることによって、初めて使用されうるものとなるのである。この「分配されなければならない」ということが、実は様々な意味をはらみ、重大な問題を生じさせることになる、と筆者は考える。(この点は後ほど触れる。) ところで、先に引用した個所に先だって、マルクスは、「共同的な、すなわち直接的に社会化された労働を考察するために……最も手近な例は、自分の必要のために……生産する農民家族の素朴な家長制的な勤労である」と述べている。[34] しかし、これは、ロビンソンの島の特徴、つまり、大世帯となったロビンソン家族の例とは言えるが、社会主義社会の特徴を示している例とは言えないであろう。何故なら、そこでは、生産物は分配されずに直接使用されるであろうから。ともかく、以上のところでは、マルクスが、市場の廃止と直接的使用のための生産を、社会主義の中心的特徴と考えていたとは言えないだろう。但し、「農民家族」と「ロビンソン」を、社会主義と同じ特徴を持つ例として、マルクスが挙げているのだと短絡的に理解すれば、そのような誤解が生ずるかもしれないとは言えるだろう。

さて、いずれにしろ、マルクスは、上記の部分では、「分配の仕方」については具体的になにも述べていない。それは生産様式の発展につれて変化する、とだけ指摘している。次に、『ゴータ綱領批判』を見ておこう。「生産手段の共有を土台とする協同組合的社会の内部では、生産者はその生産物を交換しない。……何故なら、いまでは資本主義社会とは違って、個々の労働は、もはや間接にではなく直接に総労働の構成部分として存在しているからである。」[35] 生産手段の共有を土台とする社会では、個々の労働は、はじめから社会的労働であって、その労働の生産物は、社会的必要によって生産されているのであるから、商品として交換される必要がないというのである。これだけを見ると、市場の

廃止が当然と語られているようにも思える。しかし、まだ、ここでは、社会全体としての直接的使用について語られているだけであって、それがどのように分配されるのかは、次の問題である。

では、どう分けるのか。必要な人が必要なだけ受け取るのか。そうはいかない、とマルクスは指摘する。何故なら、この社会は、まだようやく資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会だから、まだ経済的にも道徳的にも精神的にも、旧社会の母斑をおびている。従って、商品交換と同じ原則で、人々は、自分の支出した労働量に応じて受け取る以外にない。即ち「個々の生産者は、これこれの労働（共同のフォンドのための彼の労働を控除したうえで）を給付したという証明書を社会から受け取り、この証明書をもって消費手段の社会的貯蔵のうちから等しい量の労働が費やされた消費手段をひきだす。」[36]つまり、能力に応じて働き、労働に応じて受け取る、というのが、分配の原則である、というのである。この個所でマルクスが述べているのは、結局次の様なことである。この社会は分業が行われているから、各人は、直接的使用のためではなく、他人の使用のために生産する。従って、労働時間証明書のごとき、一般的等価物の役割を果たすもので、それと等しい価値表示を持つ品物と取り替える必要があるのである。このような形での分配は、限りなく、貨幣による商品交換に近いものと言わねばならない。それゆえ、マルクスも、「個人的消費手段が個々の生産者のあいだに分配されるさいには、商品等価物の交換の場合と同じ原則が支配し、一つのかたちの労働が別のかたちの等しい量の労働と交換されるのである。」と述べているのである。[37]「労働の収益」や「公正な分配」というゴータ綱領の表現について、厳しく検証し、正確な概念の使用を説くマルクスが、一方で「生産者はその生産物を交換しない」と言い、他方で「一つのかたちの労働が別のかたちの等しい量の労働と交換される」と語ってしまっているのである。即ち、この社会では、直接的使用のための生産ではなく、交換のための生産が行われることを事実上認めていると言えよう。マルクスは、「証明書をもって消費手段の社会的貯蔵のうちから……消費手段を引き出す」などと、あたかもこの社会の経済システムの細部にわたる青写真を描くような

表現をし、しかもそれを物々交換的配給社会というようなイメージで述べている。しかし、これは比喩的な表現にすぎず、マルクスの真意は、ゴータ綱領の「公正な分配」という規定に関連して、原理的なことを述べることにあったのであって、社会主義社会での分配の具体的な仕方を詳しく描くことではなかった。従って、彼は「いわゆる分配のことで大さわぎをしてそれに主要な力点をおいたのは、全体としては誤りであった」と反省し、「いつの時代にも消費手段の分配は、生産諸条件そのものの分配の結果にすぎない。しかし、生産諸条件の分配は、生産様式そのものの一特徴である」とし、資本主義的生産様式にはそれなりの、社会主義にはそれなりの、消費手段の分配が生じる、と言う原則をおさえて、この部分の叙述を締めくくっているのである。[38)]

以上のマルクスの主張の一部を取り出して、これを教条的に解するところから、彼の社会主義には市場が存在しない、とみなされるようになったのではなかろうか。しかし、ロシア革命直後の一時期の経験の後には、ソ連も市場経済を導入する方向に進んだのであって、上のような解釈の誤りが現実によって検証されたと言えよう。さて、マルクスの「資本主義から生まれたばかりの共産主義社会」が、細部はともかく、概ね商品交換的、市場経済的特徴をもっているという点について、もう一言だけ述べておきたい。その社会は、分業によって、他人の使用のための生産をするから、生産者の労働が社会的に有用であるかどうかは、社会的必要によって計画された生産であるというだけでは保証されず、その労働生産物が実際に交換され使用または消費されることによってはじめて確証されるのである。つまり、社会的必要によって作られても、不良品として引き取り手が誰もいないということがありうるからである。このような事態を避けるためには、市場競争が必要ということになろう。さらに、マルクスは、この社会での分配が「労働に応じて」行われる理由として、この社会がまだ資本主義社会の母斑をおびており、従って、商品の等価交換と同じ原則が支配するほかないからだ、と述べていた。しかし、それだけの理由でないことは明らかである。何故なら、その社会は、マルクス自身が述べているように「それ自身の土台の上に発展した共産主義社会ではない」からである。即ち、未だ

その社会は、程度はともあれ、希少性を特徴としているのである。希少なものを「公正」に分けるために、等しい尺度が必要であり、それは、労働量（等しい質という点も勿論含まれている）しかあり得ないということなのである。ところで、この希少性社会で生産力を発展させるためにはどうすればよいか。これも社会的必要による計画で、というだけでは不十分であろう。つまり、個々の生産者を、生産性の向上へと動機づけるためには、それだけでは駄目であって、何らかの個人的欲望の刺激による競争が必要だということである。従って、ここにも市場経済の必然性がうかがえる。勿論、これは市場万能論でないことは既に述べておいたし、より人間的な社会のためには、欲望充足をめざしての競争社会を、人間的諸能力の発揮をめざす社会へと転換する必要がある、という点を前提とした上での話である。

七　資本主義と労働者の自由をめぐって

最後に、本節では、これまでの議論に関連して、資本主義社会における労働者の不自由というテーマに触れておきたい。ここで取り上げるのは、G. H. コーエンの主張、および、これに対するグレイの批判である。

コーエンの主張はこうである。資本主義社会では、プロレタリアはプロレタリア階級から脱出する自由があり、その階級にとどまって労働力を売ることを強制されているわけではない。しかも、どのプロレタリアにも、その脱出のチャンスは等しく存在している。但し、その出口の数は少ない。従って、ある人が脱出する自由は、他の人がそうしないということを条件としての自由である。即ち、各人は、他の人が同様の自由を行使しないという条件でのみ自由である。一人が自由を行使すれば、他はそれを失うのである。それゆえ、たとえすべてのプロレタリアにプロレタリア階級を脱出する自由があるとしても、プロレタリア階級は囚われた階級である。以上である。[39)]

これに対するグレイの批判は、大要次のとおりである。彼は、まずコーエンの主張を、次のようにまとめている。ある労働者が資本家になる自由は、他の

労働者が同様の選択をしないということに依存しているから、階級としての労働者は、資本主義社会では不自由である。これに対して、グレイは問う。一体資本主義のもとで、どのくらいの数の労働者が、そしてまたどのぐらいの期間資本家になれば、労働者階級の不自由ということが否定できるのか、あるいはまた、資本主義が資本主義でなくなってしまうのか。そして、グレイは指摘する。コーエンの主張が意味するところは、結局、すべての、あるいはほとんどの労働者が資本家になれるのでなければ、労働者は階級としては自由といえない、というものである。だが、これはおかしいとして、グレイは電話システムを例にあげて皮肉っている。電話システムの加入者は誰も、他のすべての、あるいはほとんどすべての加入者と同時に、電話システムを使用できないなら、電話利用者階級は、そのシステムによって不自由にされる。こんな馬鹿なことは誰も言わないだろう。そもそも社会制度というものは（例えば最低所得保障制度)、制限的利用のもとでのみ成り立ちうるのであって、このことをもって、その制度の利用者階級全体を不自由にするものだと非難することは、間違いだからである。以上である。[40)]

コーエンは、グレイによって手玉に取られ、またいい様に料理されている、といえよう。グレイは、資本主義のもとでの労働者の不自由を主張するマルクス主義者の議論の中で、最近では最も強力なものとして、コーエンを取り上げているのである。[41)]しかし、また、なんとも立派なマルクス主義ではあることだ。全体、資本主義社会における労働者の不自由とは、資本家になる自由があるかないかということに関する問題なのか。ほとんどの労働者が資本家になる自由がないから、労働者は不自由なのか。奇妙な議論である。資本主義社会は、身分制社会ではないのであるから、誰も労働者であることを強制されるわけではない。誰でも資本家になる自由はあるし、またほとんどの人は資本家にはなれない。こんなことは自明のことである。しかし、ほとんどの労働者が資本家になれないから、労働者は不自由だ、などとは誰も考えはしない。資本主義社会だから、労働者階級が存在するし、発達した資本主義社会では、労働力人口中、労働者は圧倒的多数である。労働者の中の誰かが、労働者をやめて資

本家になったとしても、必要ならその後はすぐに補充され、いつでもその社会の資本主義の発展段階に対応した割合で、労働者階級の大群が存在するのである。その労働者階級に属する人々は、資本との関係の中で、搾取され、支配され、疎外されているのである。それゆえ労働者は不自由なのである。これが、資本主義社会における労働者の不自由の内容なのである。この不自由を基礎として、市民として社会的にも、国民として政治的にも支配され、不自由を強いられるということがあるのである。何が不自由なのか。自由に自分にとっての価値を選び、その価値観に基づいて、つまり自分の意志で、自分の生活と人生を営む、このことができないのである。人間らしい暮し、いわゆる自己実現が自由にできないから、不自由なのである。人間は、資本家になることを目的として生きているわけではない。資本家になることが、誰にとっても自己実現を意味するわけではない。従って、資本家になれないことが、労働者の不自由の内容だなどというわけではなく、また、それが労働者階級全体として不自由であるということの意味だというわけでもないのである。

先にグレイの疎外に関する議論を見たが、彼は、労働者の疎外を、市場に原因するものとしか看做さず、肝心要の生産関係を全く無視していた。ここでも全く同様である。そしてまた、このグレイが、最強のマルクス主義論者として持ち上げるコーエン自身が、同じく市場論者なのである。二人は、同じ穴の中で議論しているのである。資本主義市場社会では、誰でも資本家になる自由が等しくあり、誰も労働者になるよう強制されない。しかし、みんなが資本家になってしまったのでは、資本主義でなくなってしまうから、全員が資本家になる自由はない。従って、労働者は不自由だ。これがコーエン。全員が資本家になれないのは当り前であって、それが労働者の不自由を論証するものだなどというのは馬鹿げたこと。市場では、資本家だって自由ではなく、思い通りにならない市場の動きに翻弄され、資本家である自由が保障されているわけではなく、労働者に転落することもある。これがグレイである。何とも宙に浮いたような議論である。それは、資本と労働者という関係の中で、労働者の不自由を捉えないところに原因があるのである。J. ロールズは「自由市場の利用と生産

用具の私的所有との間に本質的な結びつきがないことは自明である」と述べている。[42] つまり、資本主義だけではなく、社会主義も市場経済を利用しうるのである。ということは、資本主義固有の本質は、市場経済という点にはなく、生産手段の資本主義的所有という点にある、ということである。この自明の点が理解できず、コーエンもグレイも、言わば副次的、技術的な市場経済という点に、資本主義の本質を求め、ここで労働者の自由の問題を論じてしまったのである。生産手段の所有に基づく生産関係という本質的な所で、労働者の不自由を見ず、変な穴に入って見ようとするから、議論が宙に浮いてしまい、現実が認識できなくなってしまうのである。

註

1) 小論で取り上げるのは次の文献である。John Gray, "Marxian Freedom, Individual Liberty, and the End of Alienation," in Ellen Frankel Paul et al. eds., *Marxism and Liberalism* (Oxford, 1986).
2) 次のものを取り上げる。G. A. Cohen, "Capitalism, Freedom and the Proletariat," in Alan Ryan ed., *The Idea of Freedom* (Oxford, 1979).
3) Gray, *op. cit.*, p.160.
4) *Ibid.*
5) *Ibid.*, p.161.
6) *Ibid.*, p.170.
7) *Ibid.*, p.171.
8) *Ibid.*, p.172. ここの英文は、Karl Marx/Friedrich Engels, *Gesamtausgabe* (以下小論では、本書は、*MEGA* と略記す), Ⅱ-1.1, S.126. と異なっている。従って、ここでは、独文をもとにしている高木幸二郎監訳、『経済学批判要綱（草案）1857-1858』（大月書店、1958年）、116-117頁の訳を引用した。
9) Gray, *loc. cit.*
10) *Ibid.*, pp.172-173. ここでも、グレイの引用英文は、*MEGA*, Ⅱ-5, S.48. のマルクスの原文と少し違っている。従って、小論では、Karl Marx-Friedrich Engels, *Werke* (以下小論では、M - E, *Werke* と略記し、次の訳書の巻数、頁数のみ記す), Band 23 (Berlin,1962). 『マルクス＝エンゲルス全集』、第23巻 a （大月書店、1965年）、106頁から引用した。
11) Gray, *op. cit.*, p.173.
12) *Ibid.*
13) *Ibid.*, p.161.

14) 拙稿「セルツキーのマルクス批判と民主主義的社会主義」、室工大研報、No.42、122頁。
15) M - E, *Werke*, 第25巻 b、1051頁。
16) Gray, *op. cit.*, p.185.
17) *Ibid.*
18) *Ibid.*, pp.175-176.
19) *Ibid.*, p.180.
20) *Ibid.*
21) *Ibid.*, pp.180-181.
22) *Ibid.*, p.174.
23) *Ibid.*, p.182.
24) *Ibid.*, p.163.
25) *Ibid.*, p.178.
26) *Ibid.*, pp.178-179.
27) この点の解明は、拙稿「資本主義・社会主義・自由」、室工大研報、No.42、110-111頁参照。
28) M - E, *Werke*, 第17巻、319頁。但し、訳は、*MEGA*, Ⅰ-22, S.143. に基づいて、少し変えた。
29) M - E, *Werke*, 第35巻、194頁。
30) M - E, *Werke*, 第23巻 a、105頁。
31) M - E, *Werke*, 第25巻 b、1051頁。
32) M - E, *Werke*, 第17巻、319-320頁。但し、訳は、*MEGA*, Ⅰ-22, S.143. により変えた。
33) M - E, *Werke*, 第23巻 a、105頁。
34) 同前、104頁。
35) M - E, *Werke*, 第19巻、19頁。
36) 同前、19-20頁。
37) 同前、20頁。
38) 同前、21-22頁。
39) Cohen, *op. cit.*, pp.23-24.
40) Gray, *op. cit.*, pp.165-166.
41) *Ibid.*, p.163.
42) John Rawls, *A Theory of Justice* (Cambridge,1971). 矢島鈞次監訳、『正義論』(紀伊国屋書店、1979年)、211頁。